
キャパシティ・ワールドー能力者達の世界ー

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャパシティ・ワールド―能力者達の世界―

【Nコード】

N7380Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

「君女顔だから女の子ばかりのチームね」「なんでだよ!」「レベル高い子ばかりの<チーム>にいたらレベル上がるでしょ」「そんな無茶苦茶な!」そんな先生のむちゃぶりに翻弄されて超強い能力者たちの<チーム>のリーダーにされた僕。ただの無気力少年だったのにツツコミ技術を手に入れて(これは関係ない)ヤンデレ義理妹とか僕を主と慕う無表情系少女とか個性豊かすぎて困るメンバーと日々頑張るお話。僕超頑張ってる。

第1戦 ヤンデレ義理妹、今日も元気に殺し起こし。

1

「ぐげぼ」

朝の目覚めの原因は脇腹にくる鋭い痛みだった。……勿論、腹痛なんかじゃないけど。というより朝の第一声が”ぐげぼ”はどうなのだ自分よ。

あまりの激痛に動けなくなり、数秒、固まる。その間にもう一回、もう一回とテンポ良く（されても困るけど）脇腹に痛烈な痛みが襲いかかった。

「兄様、おはようございますの時間なですよ」

鈴のような声が頭上から降りかかってきた。っていうか痛い、本気で痛い。

反応がないことに怒ったのか、もう一度脇腹に衝撃が走る。僕は決死の覚悟で体を起き上がらせた。

「起きてる！起きてるから！」

「なんだ、なら早く目を開けてくれたら良かったのになのです」てめへのパンチで起き上がれなかったんだよチクショウ。

あまりの痛みに意識が飛びそうになりながら、しかし今ぶっ飛んだら確実に殺される——比喩じゃないことが恐ろしい——のがわかってるので、必死に意識を保ちつつ、「おはよう」と声をかけた。

「おはようございますですよ、兄様」

にっこりと微笑むのは僕の義理妹だった。ふむ、本日も目麗しい。

僕の一つ下の義理妹の名前は枷かせ薙なぎ葦いげつ月。つまり必然的に僕の苗字も枷薙ということなのだが、それはどうでもいいことだ。今必要なのはこいつが僕の義理妹という点で、そして現在手にナイフを——

……、何？

手に、ナイフ？

「うわああ!？」

「兄様、毎日のことなんだが驚かなくてもいいですよ」驚くよ普通は！

でも言われてみれば確かにそうだった気がする。でも仕込みナイフをしているからといって今それを振り上げたまま腕を固定させている意味はどこにあるのだろうか。

僕はすーはーと深呼吸してから尋ねる。

「つかぬことをお聞きしますが、葦月さん」

「?何なのですか?兄様」

「何故にそのナイフを振り上げたまま腕を固定させているのでしょうか?」

きよとん、と可愛らしく首を傾げたあと――おかしなことを聞きますね的な表情で僕の方へ笑いかける葦月。

「それは勿論、兄様を殺すためなのですよ?」

「恐ろしいよこの義理妹!」

恐怖だった。まさしく恐怖だった。

笑顔で殺人宣言しちゃったよ……しかも義理の兄を!

この子の未来が不安になるなあと思いつつでも絶賛今も不安なのであった。南無南無。

とりあえずナイフをしまわせて(若干不服な顔をしたのにはスルーした)葦月とともにリビングへと向かった。おお、いい匂い。

この義理妹、僕をなにかと殺そうとしようとするところさえなければ完璧なのになあ……。顔だって悪くない。むしろいいくらいだ。いや、めちゃくちゃいいね。美少女という表現さえたりな「ぶげばっ!？」

また殴られた。

「兄様、なぜ早く食べないのですか?それはあれですか?私の料理が不味くて食べられねーよという反逆行為を表しているのですか?それならば容赦はしませんともええそうです食べ物粗末にしては

いけないという理論を振りかざして正々堂々殺してさしあげ「ちょっと待った」

なんでこいつはここまで思考が破綻しているのだろう。ていうか今のは思考に没頭してただけだろ。しかもお前が喜ぶようなことを。

と思ったものの口に出してはまた殴られるかなと思い（断じてこの義理妹に畏怖を覚えたからではない）、おとなしく朝ごはんを口にした。

数分でご飯を完食する。勿論美味しい。まあ美味しくなくても完食しなければやはり鉄拳がとんでくるのだろうか。

これが世に言うヤンデレなのだとしたら、こっちから願い下げだった。せめて、もう少しだけでいいからおとなしくはならないのだろうか……。いや、ならないだろうな。

「……では、兄様。お食事も終わったことなのですし、学校へ行きましょうなのです」

「……うん」今日は通学路で何回こいつから死の恐怖を味あわせられるんだろう。

でもまあ、こんな日常も悪くないっちゃ悪くない。

僕は学生鞆を持って、既に玄関へ向かってしまった義理妹の後を追いかけた。

2

「うん、君に来てもらったのには理由があるんだ」

「そりゃ理由がなければ誰も僕なんかを職員室に呼んだりはしませんよ」

僕の反論に、先生も「それもそうか」となにやらうんうんと頷い

ていた。

「……うん、なんで納得してるんだろう。」

そう、僕は今先生に職員室に呼び出されていた。正確には、担任の木野羣先生きのむらなのだが。

先生はパラパラと僕の成績表を見て、それからちよつとにんまりと笑った。……嫌な予感。

「あたしゃね、君にいい提案がある」

「却下します。……じゃなかった、お断りします」

「まあまあそう硬いこといいなさんな」

フツと不敵に笑う先生。

僕は顔をしかめて聞いた。

「どうせろくなことじゃないんでしょう？」

「いいや、君にとって——というか、全男子にとって羨ましい提案だと思うけどね」

「……どういふことですか？」

先生はそこで、僕の成績をさらっと言いのけた。

「君の戦闘成績はこの学校に入学した中学1年生の時からずっと横ばい。最低ランクのF」

「……わかってるんだからわざわざ口に出さなくてもいいでしょうよ」

というか、この職員室にいるのは僕たちだけじゃないですよ？

僕が非難の声をあげても先生はどこ吹く風。それどころか、煙草まですいやがった。

……煙草、苦手なんだけどな。

「いいこと？ 君、確かに素行の面では優等生だ。優等生の優等生。どこの学校に行ってもそうだろうな。特に、この変人ばかりの学校なら特にそうだ。——だからこそ、この成績は可笑しいんじゃないかい？」

「……可笑しいって、どういうことですか？」

怪訝に思って聞いてみた。

先生はすぱーと煙草を口から離し、綺麗な白い輪っかを嗜み程度に口紅が塗られた唇から生み出す。

僕は気づかれないように――それでもさっきよりも強く顔をしかめた。

「あたしゃね、思ったんだ。君には、きっかけが足りない」

「きっかけ……ですか」

話がつかめずにいると、先生は呆れたように目を半眼にした。

「そ。きっかけ。君には少なからず能力があるはずだ。じゃなきゃこの学校に入れなかったはずだろう？」

「……それは、そうかもしれないけど。でも、機械の誤算ってこともありえー」

キャバシディ・ジャッジメント

”能力判定機”に誤算なんてない」

先生は言い切った。

……それは、たしかにそうかもしれないけど。

「……そこで、だ。あたしゃ、君に＜チーム＞を組んでもらうことにする」

「チーム、ってあの、＜チーム＞ですか!？」

「そ。あの、＜チーム＞。当たり前だが、君がリーダーだ。君の＜チーム＞候補者は、この紙に書いてある」

ぺろん。先生は僕に紙を差し出した。

僕はまごついて、それでもそれを受け取った。

「そこに書いてあるのは、能力が高すぎてハブられた――いわば、化け物ってことだね」

「化け、物……」

小さく、それを反芻した。

そんな人たちを統率するなんて馬鹿げてる。特に、――こんな、僕には。

「という訳で」

先生はニヤ、と目付きが悪くなった。

「君女顔だから女の子ばかりのチームね」

「なんでだよ！」過去最高に話がつながっていない展開だなオイ！
「レベル高い子ばかりの＜チーム＞にいたらレベル上がるでしょ」
「そんな無茶苦茶な！」

反論しようと先生を睨もうとして——出来なかった。

先生は笑っていた。

何も、心配はいらないというように。

僕を、信頼しているかのような、その、目で。

「頑張れ。あたしゃ、応援してるよ。なんたって君は面白い。いくらだって可能性がある。だから——」

僕は声を出さずに先生の続きを待った。

先生はそこで——いたずらっぽく笑った。

「ヤンデレ気味の妹ちゃんを任せた！」

「は？」

ハッと思つてリストを見たら——きっちりかつちり義理妹の名前が載っていた。

……アイツ……。

「ついでに、妹ちゃんは君が選ぶものにもないからね。既に君の＜チーム＞に所属決定してるから」

「もう一回言うぞ！なんでだよ！」

僕こんな教師に突っ込んだことねえよ！

「だって、君の妹ちゃんやばいんだよ？誰ともソリが合わないって
いうか……壁ばっか作ってるから、＜チーム＞組みにくいんだよね
ー」

「うっ……」

思い当たるところが有りすぎて黙ってしまった。

先生はそんな僕を見てまた笑う。

「ま、頑張れたまえ、お兄ちゃん」

「……………はい」

……ま、これも兄貴の勤めなのかもしれないしね。

ここで、僕ら兄妹の通う学校について一通り簡単な説明をしておこうと思う。

まず学校の名前だが、『戦士育成防衛機関付属学園』——略して、戦学。

そのままの学校名にそのままの略称名だが、それはまあ僕の知ったことではない。

で、この学校はその名の通りの学校だ。

現在平成26年。資源の激減、食料量の低下から他国との関係がギスギスしてきた日本には、やはり当然というか”武力を再び我が国に”という運動が120年程前に起こった。この運動を”武力再起運動”と言う。これにより——かねてから武力の確保を願いつけてきた役人が裏で後押しし——日本には再び武力が確保されることになった。

これを反対したのが米国や多数の”日本が武力をもたないことにより得をしてきた国”だった。しかし日本は反対を押し切り防衛機関を設立。

そして同時に日本の科学は更なる深みへと発展していった。いや、それが発展というのかは知らない。でも、国はそれを発展だと言いつ張った。

”超能力者”——そういうのが、正しいのか。

超人。それは火や風などの元素を操るといふ原始的なものから、フィールド透明の盾や精神的な干渉など様々な物に及んだ。

しかし、国の科学者が発見したのは”能力そのもの”ではない。

”人間の潜在的能力を引き出す薬”——キャパシティ・ブローム”能力開花”だ。

これによって、世界は騒然となった。『人間は神の力を手に入れた』と騒ぐ宗教信者に『悪魔の力を手にした』と反論する市民、『

それは他国にとって深刻な不可思議な物質となる』と述べた大国の大統領など世間は様々な意見で反発しあったが、日本の答えはただ一つのみ。『――これは、武力である。』

つまり日本にとってこれは『力』であると認めたものだから、これまで世間は騒ぐ騒ぐ。世界大戦が起こらなかったのが不思議なくらいである、と当時の人々のインタビューを見ると誰しもそう言っていた。もしかしたらそれも日本の”能力者”が何か操作でもしていたのかもしれない。ともかく、日本への批判は高まった。その”薬物”の情報を提示せよ、とどの国も言った。

日本は最初はそれを嫌がったが、戦争が巻き起こりそうなことと自国だけでは生きていけないことを感じ、一部提示という形で騒ぎは収まった。

それが、僕達の歴史だ。

そしてその頃、戦学は誕生した。

キャパシティ・ブローームを使い能力が開花すると判断された者――その判断をするのが先ほど話に出てきた”キャパシティ・ジャッジメント能力判定器

だったたりする――のみが入学できる特殊な育成学校。

小学校から高校までで成り立っていて、レベルはFからSSまで。最低ランクがFで最高ランクがSSだ。

生徒は戦士、検索者、暗殺者など自身の能力にあった分類を選び、2人から5人編成で<チーム>を組み、”任務”を遂行する。

これが、戦学だ。

ついでに葦月はレベルSの凄腕戦士だ。鼻が高いのは高いのだがそんな戦士が毎朝脇腹を蹴ってくるのだから僕の痛みは実は尋常のものではない。

それにしても。

……あいつ、やっぱり人と、<チーム>組めてなかったんだなあ……。

僕は溜息をついて家路についた。途中、クラスメイトとすれ違い、挨拶をする。

「はあ、やつと家だ……」

僕は扉を開けようとして――ふと、その手を止めた。
何か、嫌な予感がする。

「……まさか、な」

例えばだが、もしもアイツが既に僕と＜チーム＞を組むことになったと知っていたとしたら？

……考えたくもない。

と、そこで勢いよく扉が開いて僕は中に引っ張り込まれた。

「うぎゃっ」

したたかに額を玄関の段差にぶつける。

犯人はまあ、分かっていた。

「葦月……」

「兄様！兄様遅いのです！もう、もうもうもう！！今日はお祝いデーなのですよ！？さあさあ早く席について！パーティーです！パーティーなのです！」

葦月はくると（額から血を出している僕には勿論気にもとめないで）回転してキッチンへと消えてしまった。

「……まあ、いっか」

色々文句をいうのもめんどくさい。そう、僕はめんどくさがりなのである。

靴をきちんと脱いで、僕はいい匂いのするダイニングへと歩いていった。

第1戦 ヤンデレ義理妹、今日も元気に殺し起こし。(後書き)

感想頂けたら泣いて喜びます！これから頑張って書くのでよろしく
お願いします！

第2戦 無表情少女は言葉が拙いようです。

1

葦月いげつはまず静かに壁を――いや、向むかこう側にある的を見つめた。慣れているはものの、いや、慣れているからこそ慎重に、葦月は動いた。

投剣。

各指の間にさしたクナイや短剣が葦月の動きにあわせて壁に向かって投げ出された。しかしそれは壁にぶつかるなどということは起きない。的と葦月の間にある障害物の壁を楽々通り抜けた。向こうで、ザクザクという的にクナイが刺さる音がする。

葦月はふう、と息をつき、そのまま投げたクナイと同じように壁を通り抜けた。そして数秒待っているとまた壁から戻ってくる。

「全部成功しましたなのです」

「それは良かったな」

僕が褒めると葦月は嬉しそうにニッコリと笑った。それはかなり魅力的で、僕のように毎日みて慣れていない人だったならば、数秒硬直して次の瞬間にはファンクラブの仲間入りだ。

実際に何人もそういう人を見てきたしな。

葦月の能力は先ほど見せたように、”透過視”である。物を物体の間を通り抜けさせ、自身の目も物体の間を通り抜け、向こう側を見ることができる。実際には暗殺者向きの能力なのだが、葦月はこれを駆使して戦士としての自分を確立していった。恐ろしい義理妹である。しかもそれでSランクの称号と”絶対透過の投剣姫”という二つ名までつけられているのだから、尚更感嘆する。

ついでに、今僕は葦月の能力練習の立ち合いをしていた。折角、

くチーム>を組めたのだからと葦月に強引に誘われたからである。
そして、驚くべきことに実はここは葦月専用の連取所なのだった。
最上級レベルAランクとSランクには個人の練習場が割り当てられる。
相変わらず、すごい妹だ。

当の本人である葦月が満足そうな顔をしているので、今日ばかりは良しとしようか。……なんて思っていると、視界の先にクナイ、
が、「危なッ」

僕はこういところでばかり発揮される反射神経を使ってそれを避けた。

「……葦月、何が気に入らないんだ」そして何故クナイを投げるんだ。

葦月はクナイを投げ終えたポーズから寸分動かずこちらを睨みつけていた。

「兄様、これはデートなのですよ？密室デートなのです。デートデートデート」そこまでだ」

誰もお前とデートなんかしてねえよ。確かにこの練習場が（壁で隔ててあるために）若干狭いのは合ってるけど。

む、と葦月が頬を膨らませた。うむ、これもまた格別の可愛さがある。

「デートじゃなくて練習の付き合いだろ？」

「でも男女で二人きりで密室にいるんだから、デートに決まってるのですよっ！」憤慨したようにもう一度葦月はクナイを投げた。
僕はさらりとそれをよける。

僕は嘆息した。やれやれ、なんでこんな我儘娘に育ったのやら。
まあ多分大部分は僕にあると思う。甘やかしすぎたかな……。

「だったら汚い掃除用具箱の中に男女が二人でもデートなのか？」
「私と兄様の場合はもちろん「もういい」

第一掃除用具箱をデート場所に選ぶなんてどういう神経だ。僕はそこまで無神経ではない。

葦月はクナイを投げたことにより不満は少し減ったのか——僕の

寿命もちょっとだけ減った気がするぜ！——それ以上は何も言わず、ただこちらへと歩いてきた。

さて、練習も終わったみたいだし、本題にはいろいろ。

「葦月、＜チーム＞に入れるなら誰がいい？」「全員やです」

僕の隣にストンと腰を下ろした葦月はぷい、とそっぽを向いた。

……そう言われてもなあ。

僕は溜息を付いて葦月の方に顔を向けた。葦月は顔をそらしたまま、目だけこちらへ向けてくる。

さて、兄貴面をする場面かな。

「いいかい葦月？先生はリストを渡してきた。つまり、これは絶対葦月と二人じゃ駄目ってことなんだ。言ってる意味、わかるね？多分このまま誰も入れなかったら——僕の＜チーム＞は解散だ」ピク、と葦月の体が動いた。「葦月は僕の＜チーム＞ではなくなる。また他人の＜チーム＞に入らなきゃいけない。それはいや、だよね……？」

葦月は少しの間も開けずくくりと大きく頷いた。よしよし、この調子でいけそうだ。

「だから、誰か——出来れば早めに——人を入れなければいけない。だから「ヤ。」拒絶された。

何でだよ。

……こいつ、今の話聞いてたのか？

と思っていると、「でも、」と葦月は続きを口にした。

「兄様といられるなら、他人の女が居てもいい」

……他人の女って……。

ま、これでいいか。やっと葦月の賛同が得られたわけだ。

昨日のパーティーの後、いくらいつても聞かなかったのだから、僕としては上々だ。

「よし、偉いな」

僕が葦月の頭をなでると、葦月は嬉しそうに頭をすり寄せた。犬かこいつは。

しっかし僕も甘やかしすぎだなあ……だからといって厳しくするつもりは、毛頭ない。

だって葦月は、僕の大切な妹だから。例えそれが義理だとしても、だ。

「さてと」

じゃ、いっちょ仲間集めといきますか。

2

とは言うもののまず誰にするか決めていない。

僕はハッキリいって無能——文字通り、無能——だ。なので葦月の能力と相性が良さそうなものがいだろう。

そうは言っても、葦月の能力そのものには物理的な物がないので、そういうのも心配なくていい。

だとすれば、何を基準にすればいいんだろうか。……顔？

いやいやいや。……一応言っておくが、どの子も美少女だった。

まあうちの義理妹には勝てないけどな！

と僕が心の中でシスコンっぷりを発揮する。どちらかといえば親のような感情に近いけど。

ま、葦月にはまず合わない勝気そうな女の子はやめておこう。さすがに。

「……兄様兄様」つんつん、と葦月が僕の袖をつついた。「兄様はどの子がお好きなのですか？」

「……………えと、どうして？」

数秒躊躇って聞いた。葦月はふふ、と怪しげな笑いを浮かべて「まずそいつからぶっ殺しにいきますです」と恐ろしいことを言うてのけた。

うん。正直に答えてなくてよかった。

葦月はさっきからふふふふ、と笑いながらナイフの刃を研いでいた。……さっきの話、覚えているのか？

取り敢えず怖いので葦月は帰らせておく。

戦学には授業というものがない。いや、あるにはある。それはただ一つ、“戦闘訓練”のみ。入学当時は“能力”や“歴史”などを勉強させられるが、それも一ヶ月程度。すぐ終わる。その後は各自が自分にあつたと思う系統クラスに行き“戦闘訓練”を受け成長するのみだ。

それすらも終わらせてしまった義理妹とそれすら分らず色々放浪して投げ出された僕には特にやることがない。

なので、今帰らせても別になんの問題もないわけだ。僕が「今日は凝った物が食べたいなあ」と呟くと葦月はナイフを研ぐ手を止め、一目散に家へと帰ってしまった。今日の晩ご飯はさぞかし手が凝ったものだろう。まだ2時なわけだし。

そういうわけで一人になった僕は、一応目星を付けておいた女の子へ会いに行くことにした。

はじつかこおり
端塚古織。葦月の2つ下——つまり、中学1年生か。

AランクとSランクの中間に位置する（しかもその中でも上）有能中の有能の少女。ただ、言語能力に多少の弊害があり、とのことだそうで。

まあ、構わない。あつて話をしてみよう。

やはり有能だからかこの端塚さんにも練習場が割り当てられているみたいなので、今はそこへ向かっている。

そこは葦月の練習場からそうかからない場所にあつた。

「……ここか」

小さく、『端塚専用』と書かれたプレートがかかっている。ここに間違いない。

そう思って扉を少し開け——の前に、扉を開かれた。

「……」

驚いて声を失う。いや、これは当然か。

扉の前に立っていた人間の気配など、戦士として気づいて当たり前、なのかもしれない。

勿論、普通の女の子としては落第点なのかもしれないが。

——そう、端塚古織が目の前にたっていた。無表情の、塊とでも言える顔だったが、それゆえに、美しい。

「……用」端塚さんが口を開いた。

「え？」

単語しか聞き取れなかったので、僕がそう聞き返すと、端塚さんはもう一度

「用」

と繰り返した。

……成程、これが言語能力の弊害ね。

ま、この程度障害にも弊害にもならない。

「君が端塚古織？」

「……」こくり、と頷いた。

「じゃあ、僕の＜チーム＞に入らないか？」

「……」ふるふる、と首を横に振った。

うん、断られたらしい。

じゃ、帰るか。

「そっか、じゃあ僕は帰るね」

そう言って来た道を帰ろうとしたとき、「え？」ぎゅ、と袖をつかまれた。

振り向くと、端塚さんの瞳孔が僅かに開いていた。

「あなた、わたしをどういんに、ちーむしない？」

ゆつくりと、確かめるように端塚さんは言葉を紡ぐ。

端塚さんは真っ直ぐに僕の瞳を覗き込んだ。

……やっぱり。僕は心の中で呟く。

「君、ずっと強引にチームにいれさせられてたんだ」

こく、と大きく端塚さんは頷いた。

「みんな、わたし、ちーむしたがる。だから、ちーむいれる」
つまり、彼女の能力は高すぎた。だからこそ、＜チーム＞に入らざるを得なかった。

葦月のように。＜チーム＞なんて、馴染めるはずのないものに。

「でも、あなたたちがう。……どうして？」

どうしてって言われても。「……なんとなく、かな」

何故か納得したのか、端塚さんは「……」と無言で頷いた。

……いつ、手を話してくれるのかなあ。まあ、可愛い子だからいいんだけどさ。

「……なまえ」

「名前？」

そうか。僕はこの子を知っているけど、この子は僕のことを知らないのか。

「枷薙。枷薙^{かせなぎ}篝^{かがり}だ」

「……かがり」

端塚さんは僕の名前を反覆して、それから2階、頷いた。

「……？」

それだけすると、端塚さんは練習室の中に入ってしまった。

「……なんか、不思議な子、だな……」

僕は呆然と、そう呟いた。

第2戦 無表情少女は言葉が拙いようです。(後書き)

感想・評価いただけたら嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7380y/>

キャパシティ・ワールドー能力者達の世界ー

2011年11月22日19時46分発行